

金沢

K  
9/

国

ジ

下

下

下

主催: 金  
共催: 金  
(-)  
(-)  
後援: 北  
金  
特別後援

別途費

同じ合

金沢 J

http://  
120.00

お内仏のある学長室で3学部体制移行に向けての構想を語る木越学長  
=京都市北区の大谷大学

# 木越 康

(金沢市出身)

21  
世紀の顔  
⑥3

# 改革の揮 挑う 53歳

KIGOSHI YASUSHI

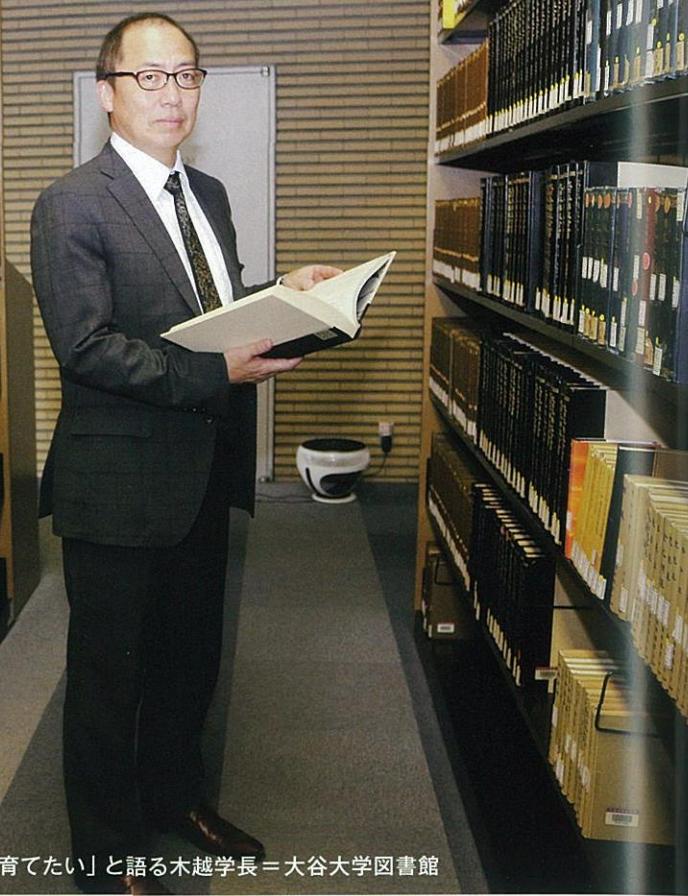
今年4月、53歳で真宗大谷派が設立母体の大谷大学（京都市）の学長となつた。

昭和以降では最も若い年齢での就任出身地の金沢からも注目が集まる。石川県関係では2人目の学長となる。

創立以来115年間、文学部だけの単科大学を通して大谷大学は、2018年4月に3学部体制に移行する。間近に迫った大事業に向けて豊富な実務経験が買われた形で、「より現場に即し、困難に悩む人に寄り添いながら親鸞の教えを生きる人間を育てたい」と理念を語る。

父の木越樹氏が真宗大谷派の北米開教師を務めていた1963（昭和38）年、米カリフォルニア州で生まれ、4歳まで暮らした。その後、自坊・光専寺がある金沢市で小・中学校時代を過ごした。

「親鸞の教えを生きる人間を育てたい」と語る木越学長＝大谷大学図書館



業では、法義に篤い金沢の寺で経験したものは肌合いの異なる、思想的な仏教に知的好奇心をかき立てられた。

「釈尊の最初の説法などを通し、根本的な苦しみの原因は外部ではなく人間の精神にあると教えられ、とても面白いと思った」

専門は真宗学だが、研修員としてキリスト教系の大学でも学び、キリスト教の教会論を通して浄土真宗の社会性、仏のはたらきがどういう形で社会の中に実現していくかを考えてきた。同朋社会の顕現を願う言葉の端々に、真宗の信仰を中心に地域社会が営まれてきた加賀の長い伝統が生きているようだ。

## 被災地での学び

東日本大震災

発生時には、学生部長として大谷大の学生有志によるボランティアバスの運行を始め、被災地で学生たちと共に活動した。その時、周囲から聞

こえてきたのは「ボランティアは自力の行いであつて、他力の念仏一つとする真宗的ではないのでは」との声だった。

それに応え「ボランティア活動を躊躇させるものとしてある真宗の理解は誤りである」と言い切った近著『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』（法藏館）が話題を呼んでいる。

20回近く足を運んだ被災地では、息子を亡くした夫婦と出会つた。

「私はね、三百六十五日泣いたんよ。泣いて、泣いて、泣いて、毎日泣いたんよ。だからね、もういいの……」

そう言ひながら、また泣くであろう母親の姿に、『歎異抄』にある親鸞の言葉「地獄は一定すみかぞかし」の地獄とは「三百六十五日泣くこと」なのだと初めて知つた。文献の研究は大切だが、書物を通してのみ親鸞の教えを学び、「わかる」ことの愚かさ。

## Profile ◎木越 康（きごし・やすし）

1963年、米カリフォルニア州生まれ。小中学校時代を金沢で過ごす。

大谷大学大学院文学研究科博士課程（真宗学専攻）満期退学。私学研修福祉会国内研修修了。大谷大学文学部准教授、教授、副学長などを経て2016年4月から現職。

著書に「『正像末和讃』を読む」など。



仙台市内の仮設住宅で学生たちと炊き出し活動をする木越さん＝2013年2月

そして、その言葉が生まれた人間の苦悩の大 地を離れてはいけないと自らに言い聞かせた。

## 社会と関わる

3学部体制とな  
つて従来ある文学

部のほかに新たに加わるのは、社会学部と教育学部である。全体の定員が増えるわけではないが、学部としてその2つの学部が独立することで、より社会や現場と直接かかわりを持つようになる。

「教室に閉じこもってだけでは、現実は見えない。学生たちに周りを見させ、他者と接し、時には挫折し、リアルな世界で実際の解決を考えさせることが求められている」初代学長（学監）である近代日本の偉大な佛教思想家清沢満之から28代、新学長が担う使命は大きい。

# 北國文華

2016秋  
第69号

特集

## 鈴木大拙 没後50年とつておきの話

看取った秘書が  
語る師の臨終

岡村美穂子

『東京ブギウギ』

作詞は大拙の息子

山田寛治

山折哲雄

美空ひばりとの意外な共通点

ひろさちや

なぜ大拙の英書は分かり易いか

21世紀の顔 大谷大学学長 木越康(金沢市出身)

わが人生忘れ得ぬこと 文化功労者 二谷吾一

